

## 短大特任教員教育研究業績書

平成30年 5月7日

氏名	ふりがな	所属	職位	性別
島貫 織江	しまぬき おりえ	保育学科 通信教育課程	助教	女

## 担当科目名

環境指導法

## 学歴

和暦(西暦)年 月	事項	学位
平成12年3月	山梨大学教育学部中学校教員養成課程保健科卒業	学士
平成16年3月	山梨大学大学院教育学研究科修士課程教科教育専攻保健体育科専修 修了	修士(教育学)

## 教育歴・職歴

名称	期間	教育内容又は業務内容
長野市立浅川小学校 (講師)	平成12年7月 ～平成13年7月	小学校1年生(翌年2年生7月迄)の担任
山梨大学ティーチングア シスタント	平成14年4月 ～平成16年3月	野外運動学関連の授業におけるアシスタント
独立行政法人国立青少年 教育振興機構	平成16年4月 ～平成30年3月	事業の企画運営、調査研究、利用者の受入等
仙台大学 (非常勤講師)	平成29年5月(短期)	野外教育指導者育成プログラム担当
小田原短期大学	平成16年4月 ～現在に至る	保育学科通信教育課程 助教

## 所属学会等

名称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
日本野外教育学会	平成10年6月 ～現在に至る	大会参加・口頭発表(広報委員平成28年～現在)

## 社会活動等

名称	活動期間	活動内容
文部科学省委託事業青 少年元気サポートプロ ジェクトフォーラム	平成21年11月	このフォーラムのテーマである「自己肯定感を高めるため に、指導者にできること～青少年活動の意義と指導者のあ りかたについて～」について、データとそれまでの実践を もとにした講話を行った(公益社団法人ガールスカウト日 本連盟主催)。
国際野外活動フォーラ ム	平成22年8月	野外活動の有用性を国際的な視点で研究するために、世界 から19か国40人の野外活動指導者が招聘された場での データを基にした講話、話題提供を行った(公益財団法人 ボーイスカウト日本連盟主催)。
栗原市立岩ヶ崎幼稚園	平成27年6月	「家庭教育学級」において、4歳児と5歳児及びその保護者 対象の遊びの紹介「親子で遊ぼう」と幼児期にどのような力 をつけたらよいか、そのためにどのような体験をさせたらよ いかについて、自己実現、欲求等をキーワードに保護者対象 に講話を行った。
栗原市立一迫幼稚園	平成27年7月	「家庭教育学級」において、親子対象の体を使った遊びの 紹介と幼児期にどのような力をつけたらよいか、そのため にどのような体験をさせたらよいかについて、自己実現、 欲求等をキーワードに保護者対象に講話を行った。

栗原市立高清水幼稚園	平成 28 年 1 月	「家庭教育学級」において、幼児期にどのような力をつけたらよいか、そのためにどのような体験をさせたらよいかについて、自己実現、欲求等をキーワードに保護者対象に講話を行った。
栗原市幼稚園教育研究会	平成 28 年 4 月	栗原市幼稚園教諭対象に、幼児期にどのような力をつけたらよいか、そのためにどのような体験をさせたらよいかについて、自己実現、欲求等をキーワードに講話を行った。

担当教科目に関する資格・免許等

名 称	取得年月	取 得 機 関
小学校教諭専修免許状	平成 16 年 3 月	山梨県教育委員会 (免許状番号：平 15 小専第 30 号)
中学校教諭保健体育専修免許状	平成 16 年 3 月	山梨県教育委員会 (免許状番号：平 15 中専第 32 号)
高等学校教諭保健体育専修免許状	平成 16 年 3 月	山梨県教育委員会 (免許状番号：平 15 高専第 149 号)

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 野外教育入門シリーズ第2巻「安全管理と安全学習-つくる安全、まなぶ安全」	共著	平成 23 年 7 月	(株)杏林書院 自然体験活動研究会編	「5. 子どもへの配慮」について実践をふまえて執筆した。子どもたちの活発な行動力や豊かな発想は自然の中でこそ育まれるが、自然の中には様々な危険が潜んでいるうえに、子どもたちはしばしば大人の理解や予想を超える行動をとることがあり、安全管理や安全教育の徹底を図るのが難しい面もあるということについて、子どもの指導にあたっては、行動をよく観察し、危険行動や問題行動等をよく把握した上で、子どもに対応した安全への方策を立てることについて解説してある。
野外教育学研究法	共著	平成 29 年 12 月	(株)杏林書院 日本野外教育学会	第 3 章調査研究法とその成果において「代表的な調査研究を用いた研究の執筆者による解説」、「3.3.1 尺度の開発に関する研究」について執筆した。ここでは自然体験活動によって育まれる力として問題解決力に焦点を当て、その教育効果を測るために問題解決力尺度作成の過程について述べた。より精度の高い尺度にするために、尺度作成に必要な手順は出来る限り経て、再現性、妥当性の検討を行った。それによって測定された教育効果はより重みのあるデータとなる。
(学術論文等) 問題解決力を測定する尺度の作成ー自然体験において育まれる問題解決力を測るー	共著	平成 16 年 10 月	野外教育研究	予備調査、統計処理等を経て作成した尺度「問題解決力尺度(児童用)」と自然体験の調査項目を用い、小学生を対象に調査を実施したところ、自然体験が豊富な対象ほど、問題解決力が高いという結果が得られた。また、問題解決力尺度とともに、調査対象が欲求をどのように満たしてきたか、満たしているか、日常の様子についても調査したところ、問題解決力が高い対象は、日常欲求が内発した時、それを満たすために「自分で行動に移してきたことがわかった。
「プログラムのないキャンプ」実践報告	単著	平成 20 年 3 月	国立青少年教育振興機構研究紀要 第 8 号	ねらいに向かって企画運営者が工夫することで、子どもたちが自ら方向性を見出し、行動を起こそうと考え、判断、決断して実行に移す場として、「プログラムのないキャンプ」の有効性が示唆された。

青少年教育施設における支援、指導形態についての調査報告	単著	平成21年3月	国立青少年教育振興機構研究紀要 第9号	国立青少年教育施設における指導形態の実態と、それを利用する青少年教育団体引率者の意識・要望を調査したところ、指導・支援内容について、施設と利用団体引率者に意識のズレがあることがわかった。それらの結果から、当施設における利用団体への指導・支援形態を見直す機会となり、より効率的で質の高い指導・支援を目指すための一資料を得ることができた。
中一ギャップ解消に向けた青少年教育施設の役割	共著	平成22年3月	国立青少年教育振興機構研究紀要 第10号	中1ギャップ解消に向けたさまざまな取り組みがある中で、国立能登青少年交流の家では、H市教育委員会が平成18年度から行っていた取り組みに集団宿泊体験学習を取り入れることを提案し、平成20年度から関わった。そこで、市内の1中学校区すべての小中学校5校の小学6年生と中学1年生が当所に一堂に会し、1泊2日で事業を実施することになった。そのため、教育委員会の要望に応え、「コミュニケーション能力」の育成を目指したプログラムを企画立案し、その効果を探るべく調査を行った。
(学会口頭発表) 長期キャンププログラムについての一考察～国立青少年教育施設の事例から～	単著	平成20年6月	日本野外教育学会	長期であることを活かして、参加者が自分たちでプログラムを決めるキャンプについて報告した。自分たちで決めるためには、企画運営側としてどのような要素が必要であるかについて事例をもとに報告した。
環境に配慮した野外活動への青少年教育施設の取り組み～花山砥沢の保全と活用を目指して～(第3報～)	共著	平成20年6月	日本野外教育学会	これまでの調査研究をふまえて、青少年教育施設で提供する活動を「安全で充実した沢活動」とし、そのために指導者講習会の必要性等を報告した。
青少年教育施設の支援・指導形態の実態と展望	共著	平成21年6月	日本野外教育学会	国立青少年教育施設における指導形態の実態と、それを利用する青少年教育団体引率者の意識・要望を調査し、より効率的で質の高い指導・支援を目指すための一資料を得ることができた。
ガールスカウト経験が中・高生女子の自己肯定感に与える影響	共著	平成23年7月	日本教育心理学会	社会教育であるガールスカウト活動が、少女の自己肯定感に対し、影響を与えることができるのかを検証するために、自己肯定感及び性受容に関連する尺度について同年代の女子との比較を行った。
各年齢期における体験活動の違い～年代比較によって～	単著	平成23年10月	日本野外教育学会	国立青少年教育機構が全国の小学校4年生～中学生(地域性を考慮した抽出)を対象として実施した自然体験活動等に関する調査の二次分析により、各年齢期において自然体験活動等体験したことのある活動に違いがあるのかについて年代比較を試みた。
The Effects of self-esteem on questionnaire response	単著	平成24年6月	JOES-IRF(日本野外教育学会)	自尊感情が質問紙の回答に影響を及ぼしているのではないかという仮説をもち、これまでの調査結果を用いて事例的に考察した。
リフレッシュキャンプを通じて被災地子どもたちを支える一花山青少年自然の家取組及び継続的調査から	単著	平成25年6月	日本野外教育学会	震災直後から年間4回の事業において継続して「無気力」、「愛他性」、「うつ反応」、「精神的混乱」、「不安反応」といった心と身体の変容について震災直後から継続して5年間調査を実施したところ、それまで何らかの変容が見られており、それをふまえて事業を展開した。しかし、平成29年度になって、変容がみられなくなり、震災の地域子どもたちを対象に心と体の状態について追究する意義が薄れてきたのではないかと捉えられた。
野外教育における東日本大震災復興支援の今後～心身の影響について5年間の継続調査の結果から述べられること～	単著	平成29年6月	日本野外教育学会	

<p>(表彰)</p> <p>日本野外教育学会第2回学会奨励賞</p>	<p>平成 21 年 6 月</p>	<p>学術論文「問題解決力を測定する尺度の作成ー自然体験において育まれる問題解決力を測るー」が対象となり受賞</p>
<p>(指導歴)</p> <p>国立花山青少年自然の家主催「東日本大震災対応事業はなやまんまるキャンプ」</p>	<p>平成 27 年 5 月</p>	<p>小学校高学年対象事業での企画運営、指導、カウンセリング</p>
<p>国立花山青少年自然の家主催「主体性・社会性を育む幼児・低学年児童キャンプ大自然に“いっしょ”」企画運営</p>	<p>平成 27 年 8 月及び 9 月</p>	<p>幼児及びその保護者対象事業での企画運営、指導、幼児カウンセリング</p>
<p>山梨幼児野外教育研究会・山梨大学川村研究室主催「第18回オータムキャンプ」於：山梨県 プログラムディレクター・ヘッドカウンセラー</p>	<p>平成 28 年 11 月</p>	<p>小・中学生対象（2泊3日）のキャンプでの企画運営及びカウンセリング（サポート）</p>
<p>国立花山青少年自然の家主催「第38期ボランティアスクール」企画運営</p>	<p>平成 29 年 5 月</p>	<p>大学生、一般成人対象事業での企画運営、指導</p>